

# 継続的な支援

# 必要性を実感

岡山経済同友会（岡山市北区厚生町）が8月末、東日本大震災の被災地・岩手県大槌町に派遣した大学生らの復興支援ボランティア。参加者は今も残る爪痕に巨大災害の猛威を実感、継続的な支援の必要性を学んだ。現地での3日間の活動に同行した。（山本友志）

## 岩手・大槌町

活動2日目の26日、大2年白髪光洋さん学生らは大津波にのま（19）。山のようながれきた町中心部で、がれきを見やり、民家の基き撤去などに当たった。町の死者・行方不明者は1400人を超え、建物は漁協施設や住宅の基礎、壁などを残すのみ。崩れた堤防の隙間から、太平洋に続く湾が見える。

「発生時のテレビ映像は外国の出来事のようだったが、想像以上の（ひどい）と環太平洋

「何となく」に来自分が恥ずかしかった。



# 学校の枠を超えた活動へ思い

### 取材メモ

きない支援をーとの遭つかもしれない」と話した学生がいと話し「仲間やスポンサーを募り、被災地支援を始めたい」と、新たな一歩を踏み出そうとする姿に胸が熱くなった。彼らが進める計画に協力せざるにはられない、と

▽：今回のボランティア取材で印象的だったのは、当初漠然とした思いで大槌町に入った学生の「変化」。被災者の喜ら

### 惨事直視 学生に変化

△：記者は入社2年目の24歳。学生時代、ボランティアへの関心が薄かった。町出身のAMDA調浩教育問題委員(70)は「自らぶつかる場をつくり、理解し合おうとする姿が頼もしい」と目を細めた。

「前向きに生きよ、さまたげが、自らのうとする住民に逆し生活を見つめ直すきつ



住宅の基礎部分を埋め尽くす土砂とがれきを取り除く学生ボランティアら＝8月26日、岩手県大槌町

「悲劇を人ごとと思っ

最終日の未明、白髪

「（ここでもっとでき

姿に、同友会の近藤章